

農家出身若者グループ代表 児玉 光史さん

旧武石村出身

2007年、3人の「せがれ」の偶然の出会いが事の始まりだった。

東京大学卒業後に都内のIT（情報技術）系企業に

入社4年で辞めた。研究生



「セガレ」の活動で農産物を売る。「故郷への思いは深いですね。セガレを始めて親との会話も増えましたよ」東京・渋谷

入り、ソフトウェアの営業をしてきた。だが将来、何をしたいのかを悩んで生きてきた。だが、仲間を介して大学に戻る傍ら、社会人向け農業ビジネス講座に通っていた時のことだ。

「お互い、せがれだよ」と「継ぎたいはないよ」と「せがれだからできることはいかぬえ」。

旧小県郡武石村（上田市）のアスパラガスを栽培する兼業農家に生まれた自分、山形のサクランボ農家と兵庫の酒米農家の息子。家業を継がず東京で働く3人の農家のせがれが講座で出会い、酒を飲みながら語り合った。そこでアイデアが生まれた。「実家の野菜を東京で売ってみよう」。

「社会に何かを広めたい」というより、自分たち自身の問題が大きかったですね。農家を継ぐにしろ継がないにしろ、自分で納得できることをしたいと思っていました。その一つの形として、野菜を売ろうと」

継いでいない後ろめたさを抱えつつも、都会にいなから農業や地元のためにできることは何か。3人でグループ「セガレ」を結成。同じ悩みを共有する農家の息子や娘（「セガール」）が徐々に集まり、実家の農産物を持ち寄って、東京の表参道や自由が丘で週末に定期的に販売している。

いま30歳。武石村での少

新 **しなの人** 201

農業の新たな価値提案

年代は、農業の手伝いをしたくない一心で野球に打ち込んだ。上田高校、東大に進学後も野球に没頭。大学時代には4番で三塁手。自分の将来の仕事にまでは

「セガレ」の活動を本格的に始めた。

セガレの存在は、野球に替わるほどに打ち込める「心の安定剤」だった。農業関係の人脉を広げ、栽培や販売のノウハウを得られただけではない。

「故郷に帰ればどうなるか、今の仕事や東京での生活がどうなるか、考えるのが億劫で、僕を含めて正面から向き合っていないかった。でもセガレは、農家を継ぐ継がないは別として、前向きに考えられる環境にあります。同じ思いを共有しながら活動すると、不思議と農業はいいなと思うようになった」

活動は農産物販売だけでなく、メンバーの実家への農業体験ツアーや、野菜を食べられるカフェの運営、相続問題を考えるプロジェクトなど広がりを見せる。それぞれが抱える知恵や悩みを持ち寄り、新たなアイデアが次々と生まれていく。

自分自身でも最近、新たな仕事を始めた。福利厚生や社員教育の一環で、企業に農場を保有してもらう事業だ。健康増進サービスなどを企業に提供する会社と組み、営業活動を本格化させる。農産物を作るだけではなく、農作業を通じた心身の健康づくりや雇用創出など、農業の新たな価値を提案していく仕事だ。

考えが及ばなかった。だが、農業や故郷の長野のことを考えていると心が安らぎ、「地に足が着いた感覚」があることに気付いた。会社を辞めて東大農学部での農業経済の研究室で1年間を研究生として過ご

将来は帰郷したいとも考えている。「長野にいるだけでは得られない視点をもち帰れたらいいですね」

